

200523

絵本学会NEWS No.23

発行：絵本学会

発行日：2005年2月3日

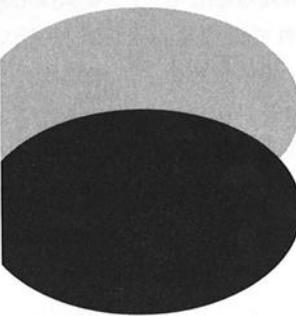
編集：絵本学会事務局・広報委員会

事務局：〒305-8574茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学芸術学系総本研究室内

Fax.029-853-2846

<http://ehongaku.musabi.ac.jp>



絵本フォーラム'04報告

絵本研究講座報告

書評批判に応える

絵本関係イベント 展覧会 インフォメーション

第8回絵本学会大会のご案内

事務局からのお知らせ

絵本学会

絵本フォーラム'04

絵本の「読み聞かせ」

—それぞれの実践、それぞれの主張—

絵本フォーラム'04が、9月4日（土）東京の世田谷文学館において開催されました。今回は、テーマを「絵本の「読み聞かせ」—それぞれの実践、それぞれの主張—」に設定し、話題提供者に絵本作家の長谷川摶子さん、児童文学作家で梅光学院大学教授の高橋久子さん、東京大学大学院・教育学部教授の汐見稔幸さんをお迎えし、それぞれ報告と問題提起をしていただきました。

第一部は話題提供者の方々による問題提起、第二部は三部屋に分かれて話題提供者を囲んでの談話サロン、第三部は話題提供者による座談会と参加者の情報交換を行いました。

今回のフォーラムのテーマの趣旨は、絵本の「読み聞かせ」が、今ブームと呼んでもいいほど関心が寄せられているという状況を踏まえてのことです。

その呼び方ひとつをとってみても、「読み聞かせ」「読みあい」「聞き読み」「読み語り」など様々で、その内容も質も、決してひととおりではありません。行われている場も、家庭、保育所、幼稚園、小学校、児童館、図書館、文庫とさまざまです。

また、絵本の読み手も、親、保育者、教師、司書、文庫主催者、ボランティアと、子どもとの関係性も多岐にわたっています。

そこで、「絵本の「読み聞かせ」」について、グローバル

な視点から、みんなで考えあえる場にしたいとのねらいから、テーマを設定しました。

第一部問題提起

第一部は、三人の話題提供者による問題提起です。詳細は、それぞれのレジュメに譲り、三人の紹介と発言の要旨を記しておきます。

長谷川摶子さんは、『めっきらもっきらどおんどん』『きよだいなきよだいな』（ともに降矢なな絵）をはじめ、多くの絵本の著作がありますが、保育士として、母親としての経験と、家庭文庫「おはなしクラブ」主宰の実践が、子どもたちをひきつける作品の魅力になっています。それらの実践をもとに『子どもたちと絵本』もあります。

「絵本と子どものどっちが好きなの？」子どもの問い合わせに、迷うことなく「子どもが好き」と答えたという長谷川さん。「子どもと私をつなぐ手段としての絵本」、「絵本の共通体験の大切さ」「子どもとつながるいい時間」など絵本をとおしての人と人の関係性について提言してくださいました。

高橋久子さんは、村中李衣のペンネームで、『かむさはむにだ』『小さいベッド』などの児童文学作家として活躍するかたわら、『子どもと絵本を読みあう』『読書療法から読みあいへ』など、絵本の読みあいの実践についての著書も多数あります。入院児との読みあいや、お年寄りとの読みあいなど、さまざまな場で読みあいを行っています。

「読みあい」という言葉で、自分自身の実践を語る高橋さんは、「本という形式の中でものがたりがつくりだす場」

「読むという行為によって、人とものがたりがつくりだす場」「伝えるあるいは伝え合おうとする意思によって生じてくる心理的な場」こうしたいくつかの「場」という視点から、実践、調査研究をもとに問題提起して下さいました。

汐見稔幸さんは、「臨床育児・保育研究会」「赤ちゃんと絵本研究会」を主宰。専門は、教育学、教育人間学ですが、教育人間学の応用部門として、育児や保育を研究対象としていて、保育界では、その発言は常に注目されています。新しいタイプの保育雑誌を目指して、保育者・親のための交流誌「エデュカーレ」を創刊するなど、保育者が相互に高めあえる場をさまざまな所で主催しています。『幼児の文字教育』『ことばに探る心の不思議』などの幼児教育に関する著書が多数あります。

「読み語り」というキーワードで、その語源について説明してくださった後、「読み語り」は読み手と子どもたちの心と身体が交わり結ばれていくことだとして、イメージの身体性、声の身体性という側面から問題提起して下さいました。

(第一部報告 岩崎真理子 日本児童教育専門学校)

絵本フォーラム問題提起者のレジュメ

実践者の立場からの問題提起

長谷川摶子（絵本作家、「おはなしくらぶ」主宰）

私は1971年から子どもと一緒に絵本を読み始めすでに30年以上たちました。最初は保育園の保育士として、ついで、母親として、さらに保育園を退職してからは、家庭文庫「おはなしくらぶ」の絵本よみおばさんとして、延々、絵本を読み続けてきました。私自身は絵本のテキストを作る作家でもありますが、作家になつたいきさつはほんの偶然、自分で意識的に求めたことではありません。私の生活の足並みを支えているのは、やっぱり子どもたちとの絵本読みの時間です。

私はなぜこんなに長い間子どもたちと絵本を読み続けて



きたのか、自分に向き合って考えてみると、いわゆる読書運動などとはあまり関係のない心情に突き動かされてきたように思います。絵本に関するエッセイや評論なども書いていますが、人に絵本や読書の価値を知らせようとか、読み聞かせを広めようとか、そんな使命感はなく、ひたすら自分の楽しみの内実や方法を吐露してきた、というのが正確な実感です。ですから、「絵本フォーラム」という場にも私は心理的にちょっと戸惑っています。そこで、私がみなさんといっしょに考えられる普遍的な問題は何か、そこが思案のしどころでした。

そんなことを考えているとき、ある小学校に絵本をよみにでかけたときのことを思い出しました。終わった後で一人の男の子が私に尋ねたのです。「おばちゃんは絵本が好きですか、それとも子どもが好きですか、一体どっちなんですか？」私は即座に答えました。「子どもです」と。一瞬のためらいもなく、言えたことに、あとで私は胸をなでおろしました。言い淀んだらどんなに後悔したことでしょう。

この場面にふくまれている問題は、遊んだり、食べたり、眠ったり、さまざまに生きている子どもという人間存在全体のなかで、本というものがどんな位置にあるのか、ということではないでしょうか。なぜ私は子どもに絵本を読むのでしょうか。よりによって、なぜ絵本なのか。保母をしていたせいもあって私はいつも絵本の位置を相対的に考えてしまうのです。そして確たる根拠をもたないままに、つまり主観的に絵本にのめりこんできました。いいのかなあ・・・。

みなさんはなぜ絵本なのか。ご自分の原動力を語ってくださいると、絵本と人間との係わり合いが足元から見えてくるのではないかと、期待しています。

研究と実践の両側面から

高橋久子（村中李衣／梅光学院大学教授）

1. 問題の所在

近年の読書活動を支えるさまざまな試みに関して持ち上



がってきた問題点、例えば朝読に関わるボランティアのありかたや、ブックスタートの普及の道筋、あるいは「絵本の読み聞かせ方」というようなマニュアルの正当性等等を議論する場合、もっとも欠けているまなざしが場の認識ではないか。

もちろん、「場」というのは、どこで読むのかというような、物理的な空間のことだけをさしているのではない。

- ・本という形式の中でものがたりがつくりだす、場
- ・読むという行為によって、人とものがたりがつくりだす、場
- ・伝えるあるいは伝え合おうとする意思によって生じてくる心理的な、場

こうしたいくつかの場がせめぎあって、「読み」の一回性をつくっているという認識。このことを慎重に捉えないと多くの問題点が周辺議論に終わってしまうように思う。

くしくも、今年の長崎における絵本学会で、鳥越信氏より提起された「本来黒子に徹すべき読み手が本の表に出すぎてきている」「本の絶対的評価というものは時代をこえてくるがないし、そういう揺るがない評価軸を研究者は持つべきである」という問題。ここで、「場」という視点を常に持ちながら、これまでの、実践あるいは調査研究を踏まえて、私なりの考えを示したい。

2. 具体的な話題

- ・大型絵本がつくる「場」と消し去る「場」。
- ・絵本の読みあいで残るもの。
- ・朝読の「場」は何につながっていくのか。
- ・言葉とは、なにものか。声とはなにものか。

3. ここまでいえるかどうか・・・

これまで、約20年間いろいろな人たちと絵本を読みあつてきて、その後のかれらとも付き合ってきて、おぼろげにわかってきたこと。それは、絵本をたっぷり楽しんだからといって、その経験が読書好きということと必ずしも結びつかないということ。逆説的ではあるが、そのことをこそ、大切にしたい。本来、作り出される「場」の異なる、絵本よみと読書は、そこで生まれるもののが異なってしかりなのだ。



絵や言葉と自分の内部のあらゆるものとの交信のゆくえを、ていねいに見つめていきたい。

「読み聞かせ」の本質をめぐって

汐見稔幸（東京大学大学院教育学部教授）

1. 「読み聞かせ」という言い方—カタリとハナシをめぐって

- ・「聞かせ」という言い方の一方向性的イメージ
- ・カタリの原義 * 柳田国男「世間話の研究」から
カタリ・・・人と人を結びつける

漢字で書くと「交わる」？

コミュニケーションの原義に近い。交わり。

「騙る」もカタル

大きさにいうなど、虚構ということと近い意味だった。イツワリとは意味が違った。

*柳田『不幸なる藝術』参照。

参照「ハナス」離す、放す、話す（口編に舌）

語る（口編に吾）

・「読み語り」という言い方の可能性

2. 「読み語り」は読むという行為を通じて、語り会うこと=子どもたちの心と心あるいは身体がリズム同調的に結ばれること、あるいは読み手と子どもの心と身体が交わり結ばれること。交わり結びつける媒体=メディアはストーリーウソを話し言葉で<語る>という行為。何歳になっても独自の意味を持つ行為。幼児だけというのは文化の貧困。

3. 読み聞かせ=読み語りは、読み手と子どもたちの心と身体が交わり結ばれていくことだから、どう交わり結びつくかは個性的であってよい。正解的な語り方はない。

・ただ、理解力という発達的テーマがあるので、それを考慮する必要。

・理解力は語り手と聞き手のリズム同調が必要。内容もあるが、内容がよく分からなくても、語りのことばによる身体的な同調やイメージ喚起の同調が起これば子どもはある程度聞く。身体的動き、リズム的動きがおきやすい語り方が大事。間など。

4. イメージの身体性

・イメージがわくかどうかということは、身体活動が活発化するかどうかに関係が深い。

・相撲のシーンなら身体が相撲を取っていることがわかる。(力の入れ方など)。

・身体運動・活動がイマジネーションの基礎。

・作品の内容にイメージが飛ぶようなものは理解されにくい。視点の安定。

5. 声の身体性

・声はジェスチャーのひとつ。コミュニケーションはジェスチャーによって行うが、それが特化したのが声によるジェスチャー。身降りに対する声降り。

・声は聞き手の身体活動を喚起する。

- ・その機能は研究されていない?
 - ・高さ、太さ、倍音の多さ、少なさ・・・
6. 絵本はイメージ喚起を手伝い、限定するメディア
- ・絵本は、それだけで独立しているのではなく、語られ、示されることによって意味を変えるメディア。紙芝居と似ている。
 - ・子どもが自分で読むのは、自分で語り、自分で聴いている。モデルがあつてのこと。
 - ・絵の個性性、色、トーン等がイメージ喚起を促す。同時に限定する。
 - ・このあたりの年齢による違いなどは研究されていないのでは?
7. その他

第二部 談話サロン<長谷川摂子の部屋>からの報告

参加者は学校、図書館、文庫などで読み聞かせの実践を行っている人、これから取り組みたいと思っている人など、百名ほどで、会場は作家としても魅力ある活動を続ける講師を迎えて、熱氣にあふれた。

参加者が多数のため、一人ずつが自己紹介の形で発言する時間ではなく、改めて簡単な講師及び著作紹介の後、まず長谷川摂子氏が自身の読書体験を混じえながら、本の価値、本を読む行為一読書についての考えを述べた。「遊んだり、食べたり、眠ったり、さまざまに生きている子どもという人間存在全体のなかで、本というものがどんな位置にあるのか」「なぜ私は子どもに絵本を読むのか。なぜ絵本なのか」これらの問い合わせを自らに問いかけ、それに答えるように、話は進んでいった。保育園の保育士として、母親として、また、家庭文庫「おはなしくらぶ」の主宰者として、30年以上共に絵本を読み続けてきた体験の中から語られる言葉は、実感にみち、耳を傾ける参加者を十分に納得させるだけの力があった。本を読むことはもとより、共に本を読むこと、本を読んで聞かせることは、原点に立ち返って考へると、プライベートな行為であること。それを体験した自身の例として、アーノルド・ローベルの絵本「ふくろうくん」中の「なみだのおちゃ」の話をあげた。<子どもが泣く>ということを、共にこの絵本を読み、機知に富んだ、なみだでお茶を入れるお話の世界に入ることで、どれほど癒されたか。この体験話の時、会場からは共感の声が寄せられた。また、岸田衿子文・中谷千代子絵「かばくん」、ルース・エインズワース文・堀内誠一絵の「こすずめのぼうけん」などをあげて、絵本を読むその時々が、子どもと自分との間にパーソナルな関係が生じる一回一回の場で、こうして本は両者の間で立ち上がり、生きてきたことを語った。

子どもにとって本は絶対的な価値をもつものではなく、

あくまでも相対的なものであるとし、本や読書に権威をもたらすことへの危惧の念は、読書離れを憂えるあまり、上段から構える形になりやすい昨今の読書推進の運動への警鐘ともとれる。それは、絵本が子どもたちの生活の一部にすぎないことを、保育する子どもたちから学んだ氏の偽らざる実感として伝わってきた。

学校での読み聞かせボランティアに対する質問には、賛成の意を表し、学校の閉塞性を突き破るにはとてもよいとの見解を述べた。また、読み方については、上手に、こういう風に読もうなどと思わず、一回一回違ってよいとし、家庭文庫で、読むのが楽しくて、自分の楽しみのためにやっているようだとの参加者の意見には、自身も長年、子どもに読むことで多くの喜びと愉しさを得てきたと同感を示した。最後に作者の生の声で「めっきらもっきらどおんどん」を読んでいただき、締めくくりとした。参加者それが、長谷川摂子氏の話から読み聞かせの原点に立ち戻り、また、読み聞かせに対する視野を広げることができた分科会であった。

(<長谷川摂子の部屋>からの報告 川西美沙)

第二部談話サロン「高橋久子の部屋」報告

出席者の自己紹介の後、高橋氏が問題提起された（イ）「読みあい」に込めた意味、（ロ）鳥越信氏の読み聞かせ論について、（ハ）「絵本にしかできないこと」とは何か、（二）大判絵本の問題点を中心に意見交換が行われました。高橋氏は小児病棟、老人保健施設、児童養護施設を中心に15年以上絵本の「読みあい」を続けてこられました。その経験から、現在の絵本研究は読者論、作品論、作家論とわかかれているが、絵本が実際に読まれる現場は三つが絡み合って存在しており、研究はそのことを踏まえて行うべきだと主張されました。高橋氏の研究は「読みあい」現場重視と研究者が陥りがちな「読みあい」の中での事象の安易な一般化、抽象化を避け、むしろその過程でこぼれていく事象や個人差に注意深く目を向ける点にあります。（イ）の「読みあい」という用語の使用もこの姿勢に基づいています。高橋氏は、絵本は読みあうのであって、親から子へ授け与えられるという方向性はなく、親と子が相互に影響しあいながら変わっていく契機になりうるのが本とは異なる絵本の特色だと述べられました。（詳細は『子どもの本の心理学』大日本図書所収論文）。

「読み聞かせ」という用語は高橋氏の「読みあい」のほかに、「読み語り」、「聞き読み」などさまざままで、統一の呼称がありません。引き続き適切な用語の検討が必要です。（ロ）の鳥越信氏の第7回絵本学会大会研究発表の主張についての発言もこの延長線上にあります。鳥越氏は「『絵本の読み聞かせ』における主役が、絵本=作品ではなく、読み手=伝達者に移ってしまった」、「いつのまにか伝達者



が作品にかわって主役」になったと主張しています。(詳細は絵本学会News no 22号)。これに対し高橋氏は、絵本を媒介として人と人が関わるのが「読みあい」であり、人抜き、場抜きの主張はおかしいと反論します。一般に「読み聞かせ」は、「読み手」が前面に出すぎると子どもの関心が絵本ではなく「読み手」に向かってしまうことから、「読み手」に過剰なテクニックはいらない、ドラマチックにし過ぎるとかえって話しの持ち味を壊すといわれています。この点は「読み聞かせ」の本質に関わる問題であるだけに更に活発な議論が展開されることを期待したいと思います。

(ハ)の「絵本にしかできないこと」の追求も高橋氏の一貫した研究テーマです。この問題は、絵本は読まれることによって完成する芸術である点と絵本は解決不可能な部分が必要であるとする二点を中心に説明が行われました。絵本は「読みあい」を重ねていくうちにテクストが内包する物語と読み手各自が持つ世界が絡み合って新たな世界を創造していく、絵本は読まれることによって完成していく(テクストの中だけでは完成しない)芸術だと主張します。この主張は従来の絵本研究にも反省を迫り、「ここがこうなっている」という分析は作家の立場に近づこうとするだけであり、むしろ子ども、絵本、親(大人)三者のダイナミズムの中で絵本を捉える、読みの構造の解明こそ必要だと思います。この点は『100万回生きたねこ』『かれえだ』などの絵本の「読みあい」における子どもと大人、双方からの聞き取り調査(データ)をもとに解説が行われました。次にレオ・レオニの発言「子供のための絵本は、解読可能な比喩だけでなく、解説不可能な部分も必要だと思います。子供の好奇心を刺激するには、何なのかよく分からぬ要素のはうだと確信しています」(『レオ・レオニ展図録』朝日新聞社所収)を引用し、この予期せぬものの存在があるからこそ、毎回一人ずつの読みあいにこだわり、その一回性の物語を根気よく記述していくことに、絵本研究の一歩があると主張します。(詳細は『BOOKEND』創刊号所収論文参照)。

高橋氏が地域や学校での「読み聞かせ」に一定の理解を示しながらも、それで十分とはいえないと言うのは、この一対一の「読みあい」の原点こそが大切なとする自負があるからでしょう。「絵本にできること、絵本にしかできないこと」の解説は、大人が読むとさっぱり分からぬが、子どもが喜ぶのは「なぜか」の正体に近づいてみると明らかになるとして、その点を解説するカギとなる「えほんご」「絵本のすきま」「きしみ」といった従来から高橋氏が追求してきた絵本に特有の現象についての言及もありましたが、時間の制約もあり参加者の十分な理解が得られるまでには至りませんでした。

(二)の大判絵本の問題は、地域や学校、図書館など人数の比較的多い子どもたちへの「読み聞かせ」が盛んになるにつれ、出版各社から「読み聞かせ」用の大判絵本が盛んに刊行されるようになり発生した問題です。高橋氏は大判絵本のすべてを否定するわけではないと前置きし、『ぐりとぐら』『ねずみくんのチョッキ』を例に大判絵本とオリジナル判を見開き毎に比較検討しながら問題点を指摘しました。特に『ねずみくんのチョッキ』は空間の緊張を欠いた判面、ページ展開が逆に進行することからくるイラストレーションの違和感、テクストの一部変更など単に判面が大きくなるだけではなく、絵本の本質に関わる問題点を含んでいることが明らかになりました。この問題はあらためて絵本の大きさや判型、ページの余白、文字の配置、ページ展開(右開き、左開き)がその絵本のストーリーや表現にとって不可分の要素であるかを再認識することになりました。

(高橋久子の部屋報告 生田美秋・世田谷文学館))

第二部談話サロン「汐見稔幸の部屋」報告

出席者の方たちに、まず最初に自己紹介をしていただきながら、汐見さんへの意見や質問をお聞きしました。そのあとまとめて汐見さんに答えていただき、さらに意見交換を行いました。参加者は、幼稚園・保育所・小学校・中学校の先生や、地域、文庫、学校等での読み聞かせのボランティアをしている方々、出版社や幼児教育教材会社勤務の方など、子どもと子どもの本に関わるさまざまな立場の方たちで、興味深い内容ばかりでしたが、ここでは、それらのいくつかを紹介しておきます。

子育て支援に読み語りは力を発揮していくことになるのか?さまざまなメディアに触れ合っている今の子どもたちにとって、読み聞かせは、深い人と人との関係性を築くことになるのか?読み聞かせという行為が大人の押し付けになってしまわないか?戦争や死を扱った作品は、子どもたちへの暴力になりはしないか?など、参加者の実践や経験に基づいた具体的な意見や質問がたくさん寄せられました。



それに対して、「はだしのゲン」などの場合、「もうみたくない」とか、最初から向き合おうとしない子どもたちが現実にいるという例を出して、汐見さんが答えてくれたのは、物語との出会いには、順序があり、「まず希望を知ってから、それを奪うものとしての戦争を知る」というプロセスが大事ではないかとの提言でした。

また、歴史を振り返ると、ラジオ、テレビ、カラーテレビと、次々に新しいメディアが登場するたびに、私たちは、それらバーチャルなものと本物を結びつける力を獲得してきた。絵本も同様に、イマジネーションの喚起力が物語との出会いを支えていて、他者に自分を生かす他者イメージを子どもたちは獲得していくことが大切であると話されました。

そして、柳田国男全集9巻にある「うそと偽りの違い」について紹介してくださり、本物のように見えることをウソという、虚構の世界の必要性についても語って下さいました。

(汐見稔幸の部屋報告 岩崎真理子 日本児童教育専門学校)

第三部座談会、情報交換

第三部では第二部談話サロンの司会者から各分科会の報告が行われ、その後話題提供者に対する質疑応答が行われました。

絵本作家の長谷川氏には絵本の創作にまつわる質問があり、『めっきらもっきらどおんどんどん』を例に説明、加えて最近岩波書店から刊行された昔話シリーズの解説と紹介がありました。続いて会場からのリクエストで『きよだいなきよだいな』の「読み聞かせ」の実演があり、喝采を浴びました。

高橋氏には大判絵本についての質問が集中し、あらためて大判の『ねずみくんのチョッキ』の問題点を見開き毎に解説していただき、ほとんどの参加者がテクストや余白の空間処理まで変更されていることを初めて知ることになりました。この作品に限らず絵本の大判化には問題点が多く、あらためて大判絵本の検討が課題として浮かびあがってきました。

「読み聞かせ」やお話し会が活発に行われるようになり、絵本を多くの子どもたちに見えるように（あるいはパネルシアターなどで）絵本を大きく書き直すことに伴う著作権問題が話題

になりました。参加していた絵本編集者の方から法律上の問題点と著作権をクリアする方法の説明があり、絵本を加工して使用する場合は必ず出版社（権利の主体は作家ですが、現状では出版社が代行、または仲介しています）に連絡し承認を得ることの必要性が確認されました。

「読み聞かせ」に対する長谷川氏、高橋氏の見解は、テクニックやどんな絵本がよいかといったことではなく、絵本を媒介とした人と人との関わりという「読み聞かせ」の原点に立ち返って考える共通の姿勢が印象的でした。

汐見氏は絵本についての関心が高まっている割には、家庭での「読み聞かせ」が広がっていないのではないか、「読み聞かせ」が子育て支援とうまくリンクして浸透して欲しいと希望を述べました。子どもたちの他者との交わり（助け合い、安心）ができるにくい現代社会では絵本を含めて読書の果たす役割は大きく、子どもが「人間として」成長していくプロセスでは昔話を大切にしたいといった示唆に富む発言もありましたが、十分な議論の時間がなかったのが残念でした。汐見氏の子どもや絵本、「読み聞かせ」を子どもの発達過程や社会システム全体の中で捉えなおすべきだという指摘は絵本研究者にとって重要な視点です。

地域の文庫や図書館での「読み聞かせ」、小学校でのボランティアによる「読み聞かせ」、様々なグループによる「読み聞かせ」の出前、「ブックスタート」の急速な普及などの行政の取り組み、「読み聞かせ」に関する出版物の相次ぐ刊行など「読み聞かせ」ブームと呼ばれるようになっています。「読み聞かせ」の拡大、浸透自体は歓迎すべきことですが、ブームには問題が含まれていることも事実です。今回の絵本フォーラムでは大きな関心を呼んでいるこの問題を研究面や実践面と多面的に検証し、参加者と共に考えたいという主旨で開催しました。「読み聞かせ」をめぐる問題点や研究課題を明記して結びとすべきですが、当日の配付資料「今回のフォーラムの主な論点」を掲載しますので参照ください。

(第三部報告 生田美秋・世田谷文学館)

絵本フォーラム『絵本の「読み聞かせ」—それぞれの実践、それぞれの主張』資料

生田美秋（絵本学会企画委員会 世田谷文学館）

◆今回のフォーラムの主な論点

- ・「読み聞かせ」とはなにか、なぜ「読み聞かせ」をするのかの検証
- ・実践者、研究者、作家それぞれの立場から見た「読み聞かせ」の意義の検証
- ・教育学、医学、心理学、児童文学それぞれの立場から見た「読み聞かせ」の意義の検証
- ・子どもは絵本の「読み聞かせ」によってどのように変わることか（性格形成、人間観・価値観、望ましい適応行動の選択）の検証
- ・子どもの読書離れの現状への対応としての絵本の「読み

聞かせ」の意義の検証

- ・子どもの発達（言語、人間性など）の観点からの絵本の「読み聞かせ」の意義の検証
 - ・地域ぐるみの子育て支援の一環としてのボランティアによる絵本の「読み聞かせ」の意義の検証
 - ・本や「読み聞かせ」に関して、過剰な親と無関心な親の二極分化の現象の検証
 - ・絵本の「読み聞かせ」の過剰なパフォーマンス化への危惧、読み聞かせは親子が基本という主張の検証
 - ・絵本の「読み聞かせ」は、絵本が主役であった時代から読み手が主役の時代になったという主張の検証
- ◆その他の重要な論点
- ・子どもの発達段階に対応した「読み聞かせ」の意義の違い
 - ・「読み聞かせ」の低年齢化をどう考えるか
 - ・絵本は「読み聞かせ」によって、最も楽しめる芸術である理由
 - ・声をだして読むことの意味
 - ・集団（保育所、学校、図書館、地域など）の場での「読み聞かせ」の意義と問題点
 - ・繰り返し「読み聞かせ」ることの意義
 - ・学校ボランティアによる「読み聞かせ」の意義と問題点
 - ・絵本選びは何でもよいか、子どもに任せるか、親が選ぶのか
 - ・声色や、芝居がかった読み方は問題か
 - ・「読んだらためになる」という絵本の選び方は問題か
 - ・絵本の「読み聞かせ」、「読みあい」「開き読み」「読み語り」適切な用語は
 - ・「読み聞かせ」のさまざまな可能性 学校の授業、読書療法、お年寄りと・・・
 - ・「読み聞かせ」は就学前までというのは間違いか
 - ・絵本は読みっぱなしでよい理由
 - ・「読み聞かせ」が「聞く耳」を育てる意義
 - ・まず読み手の自分が楽しむことの大切さ
 - ・どんな上手な「読み聞かせ」も、両親の声にかなわない理由
 - ・親の本に対する姿勢、家庭の環境が大切な理由

参考資料

- 川西美沙・岩崎真理子（絵本学会企画委員会）
- ★『クシュラの奇跡』ドロシー・バトラー著 百々祐利子訳のら書房
重度の障害児に幼児よりの絵本の読み聞かせが、どのようにすばらしい効果をもたらしたかを記録の形で、具体的に本や内容の紹介をしつつ語っている。本のリスト付き。
- ★『読み聞かせ—このすばらしい世界』ジム・トレリース著
亀井よし子訳 高文研
アメリカの各地の学校で読み聞かせを続けているジャーナリストが、読み聞かせのやり方、効果などを具体的に語っている。

★『小学生への読みがたり 読み聞かせ 低学年編』企画・編集この本だいすきの会／小松崎進／平山政男 高文研

★『幼児が夢中になって聞く 絵本の読み聞かせと活用アイディア 56』石井光恵・萩原敏行著 明治図書

1.本の紹介 2. 読み聞かせのポイント 3. 活用アイディアの文章構成で、56例の読み聞かせの本の組み合わせと活用方法を紹介している。項目別に本をまとめてあり、使いやすい。

★『読み聞かせでのびる子ども 早期教育の見直し』げ・ん・き編集部編（平井信義、岸井勇雄、梅本妙子ほか）エイデル研究所

園と家庭を結ぶ保育誌「げ・ん・き」の記事より、反響の大きかった記事をまとめたもの。

★『心を育てる絵本のリスト』はるかぜ絵本の会 楠茂宣・森下雅子・吉成悦子著 高文堂

「共生観」「精神的自在性」をキーワードとした選書で、読み聞かせによって心を育てるこをを目指している。分類テーマと「新小学校学習指導要領（道徳）」の主題との関連資料付き。

★『読み取り絵本100』（「太陽」別冊）平凡社

絵本作家、作家、読み聞かせの実践者など、各分野の人々が、自作の絵本、感動した絵本などを紹介している。

★『子どもと本との出会いのために 読み聞かせのすすめ』波木井やよい著 国土社

長く小学校の教師をつとめた著者が、読み聞かせ体験から、具体的に子どもにとっての読み聞かせのすばらしさを説いていく。ブックリスト付き。

★『読み聞かせわくわくハンドブック—家庭から学校まで』代田知子著

イラスト付きの「読み聞かせ」のHOW TO BOOK。読み聞かせの魅力とそのパワーについて、読み聞かせの会を成功させるちょっとしたコツを紹介。

★『子どもと楽しく遊ぼう読書へのアニメーション おすすめ事例と指導のコツ』黒木秀子著 鈴木淑博著 学事出版

読書へのアニメーションとは、クイズやゲームを使って一冊の本を楽しもうという試み。子どもたちが読み聞かせをはじめとして、本に興味を持たせる秘訣がいっぱい。

★『絵本でふくらむ子どもの心』高山智津子著 アリス館

豊富な読み聞かせ実践の経験を元に、絵本の魅力、絵本の力について語る。

★『感性を磨く「読み聞かせ」—子どもが変わり学級が変わる』 笹倉剛著 北大路書房

教師と子どもが同じ平面で向かい合いながら、子どもと楽しんで本を読むことの大切さを提倡し、子どもの読書推進運動について紹介する。

絵本研究講座 「絵本の時間表現」

絵本学会で始めての研究講座、企画委員会と研究委員会の合同企画による「絵本の時間表現」が開かれた。企画委員の岩崎真里子さんが副校長をしていられる日本児童教育専門学校で12月11日に行われ、約80名の出席者があった。出席できなかった方々のためにここに簡単に御報告したい。

講演者には美術家の岡崎乾二郎さんと小説家の福永信さんのお二人をお呼びした。まず最初にお話いただいた岡崎乾二郎さん（近畿大学教授）は、絵画、彫刻、建築、映画、絵本と多彩に活躍しているだけでなく、美術評論においても鋭い切り込みをみせ、アートプロジェクトや建築をみながらの楽しい反戦デモなども行っている方だ。2004年にはパートナーのはく・きょんみさん文による「れろれろくん」（小学館）と谷川俊太郎さん文による「ぱぱーぺ ぱぴぱっぷ」（クレヨンハウス）の2冊の絵本を出版されている。

岡崎さんは、「オズの魔法使い」「ノンちゃんくもにのる」「銀河鉄道の夜」「不思議の国のアリス」などの話は、竜巻きに巻き込まれたり溺れたりする一種の臨死体験により合理的につながった時間と空間の外に出るが、そのことにより子どもの世界が始まると言ふ。

子どもの頃から健忘症で、名前のケンジロウに合わせてケンボウ症と呼ばれていた岡崎さんは、子どもの時間はリニア（線的）につながらず、全体を見ずに気がついた部分だけでできあがるという。後は全て忘れるというわけだ。

映画は1秒に18-48コマ必要だが、絵本は12画面だけでも一冊になる。その12画面が不連続だとページを開くたびに新しい発見ができると、スクリーンを二つ並べて時間の圧縮と拡張を感じられる「れろれろくん」と「ぱぱーぺ ぱぴぱっぷ」を映し、はく・きょんみさんが朗読してくださいました。

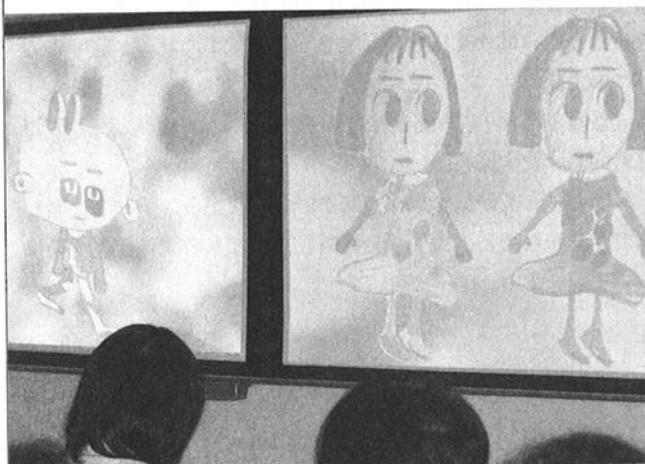
そしてフィレンツエにあるブランカッチ礼拝堂の聖ペテ

ロを描く絵が、線的に時間が流れているのではなく、異時同図により豊かなイメージを紡ぎ出すことをCGで左右、上下の壁画を重ね合わせながら説明してくれた。レオナルド・ダ・ヴィンチによる1画面に1場面が消失点に収斂するという描き方でなく、かといって中世の横に並んでいくような異時同図とは違い、ルネサンスの画家、マッサチオやマソリーノなどが描く壁画は、作品内に複雑なシステムを作り、相互に関係しあっていることがよく理解できた。御興味のある方は岡崎さんの著書「ルネサンス 経験の条件」（筑摩書房）をぜひ読んでいただきたい。ポリフォニックな物の見方が、ブルネレスキの建築や音楽などからも語られている。最後に「現代美術よりも絵本のほうが奥が深い」と結んでくださいました。

京都からわざわざきてくださった福永信さんは、「読み終えて」で第1回ストリートノベル大賞を、「コップとコップパンとペン」でZ文学賞を受賞された若い小説家である。文字の視覚的効果や読むという行為の性格などを考え、ページごとに1行づつ読み、次に2行目を読んでいくというように1文字も余白のない「アクロバット前夜」（リトル・モア）や逆に隙間を多くした大人の絵本ともいえる「あっぷあっぷ」（講談社）など斬新な試みをしている方だ。

福永さんは、「たくさんのふしぎ」（福音館書店）の「ふしぎ新聞」に「今月も美術」を連載されているが、写真と解説を紙の裏表にのせ、どちらかが隠れるようにしていること、美術家有名、無名を問わず同じようにとりあげていること、何故これが美術かを問わないことなどを話された。

そしてなかがわりえこ文、おおむらゆりこ絵の「たからさがし」（福音館書店「こどものとも」）の横書きの文を縦書き3段にして紙の左半分に、その右半分には岡崎さんの小説「座長と道化の登場」（『文学界』12月号）の冒頭部分を、もとは2段組みを3段組みにしてのせた紙を配り、各々の文を読んでくださいました。左右はだいたい同じ文字分量だが、絵本はその文字量だけで充足し、小説はほんのさわりとなり、小説家の福永さんとしてはやりきれないとのこと。



時空間にかかる絵本の言語表現と小説の言語表現とは違う。絵本の方では「ゆうじは かわらへ たからさがしに いきました。」と何の解説もなく出てくる。絵本は約束をやぶっているのではなく、時間や空間がそこだけで通用する約束事を一気に立ち上げる。絵本には不思議なスピードがあり、いつかそういった絵本の世界にいってみたいとのことだった。

後半は会場からの質問などから「子ども空想美術館」の話、谷川さん文の「ぼばーぺ ぼびぱっぷ」ができるまで谷川さんとは1回も会わずにゲームのように作っていった話、大人はストーリーや因果関係で理解するけれど子どもは個々の場面をみつめる話、絵本にはひっかかりがないとつまらない話などがなされた。

尚、コーディネーターを勤めた中川は「絵本の時間表現」について「テーマや物語としての時間」「複数画面の表現対比による時間の推移」「動きに含まれた時間」「時間の圧縮や拡張により変化するイメージ」「シンボルとしての時間」「文字や言葉による時間の表現」「時間でみた絵本構造」などについて記述したプリントを簡単に説明した。

始めての研究講座で反省点も多いにあったが、「れろれろくん」の中にある「いち たす いちは ふたり ここ たす ここは あう」という言葉のような会であったことをうれしく思う。
(中川素子)

研究委員会から

●絵本表現研究を自分の手で試してみませんか

研究委員会では絵本表現が自分自身の手で体験的に理解できるような場があつてもよいのではと考え、その第一回としてイラストレーターの小林敏也さんにきていただきました。小林敏也さんは20年間にわたり、宮澤賢治の童話を画本（えほん）にし、第13回宮澤賢治賞を受賞していらっしゃいます。使用する紙のお話をしていただいたり、画本でよく使われるスクランチの技法を参加者にも楽しんで経験していただきたいと考えています。皆様、ふるって御参加くださいませ。

「小林敏也さんを囲んで絵本表現研究の集い」

日時：2005年3月12日（土）午後1時～3時30分

場所：文教大学

埼玉県越谷市南荻島3337 TEL048-974-8811

3301教室

（教室は1時前にもおされてありますので御持参の昼食をとって下さってもかまいません）

参加費：2000円（スクランチボードなどの材料費を含む）

500円（見学のみの方）

持ち物：彫刻刀、カッターナイフ、新聞紙1枚、針などスクラッチ（ひっかき）に使用できそうなものを各自でもってきてください。

実技希望者の人数制限がありますので（25名）、御希望の方は往復葉書に以下の事を記入して2月25日までに

300-1204 牛久市岡見町960-80 中川素子

宛にお送りください。

1. お名前
2. 連絡先（住所、電話番号、メイルアドレスなど）
3. 実技希望か見学のみか、実技希望でも人数制限のある場合には見学でもよいかどうか
4. 返信に住所と名前

尚、研究委員会では会員の皆様がどのような研究の場を望んでいるのか、また皆さんの方からどのような研究の場を発信できるかのアンケートをとりたいと考えております。次のニュース（4月発行）時にアンケート用紙をいれ、まとめたものを次次号（9月発行）にのせるつもりです。研究委員から出ているものとしては、教育研究として学生などに子どもたちとの絵本作りの場を経験させてみたいなどです。どんな御意見でもけっこうですので、よろしくお願いします。

研究委員会一同

文教大学 案内図



東武（伊勢崎線）/日比谷線

北越谷駅下車 徒歩10分

各駅・区間準急停車駅。準急は越谷にて各駅に乗り換え。

書評批判に応える

本学会機関誌『BOOK END』に載った『子どもはどのように絵本を読むのか』の書評に対し、取り上げられた本の著者（監訳者）である谷本誠剛氏より批判文が寄せられ、本ニュースの前号（22号）に掲載されました。これに対し、書評の執筆者である正置友子氏より、応答が届きましたので、ここに掲げます。

本誌がこうした議論の場として活かされることは大変有意義であり、私どもとしてはこれをモデルケースにと考えておきました。しかし、正置氏の文の末尾にあります様に、谷本氏はご病気のため本年1月22日ご逝去されました。氏による再反論を持つことはかないません。

まことに無念ですが、慎んでご冥福をお祈り申上げるばかりです。
（広報委員会）

●子どもたちと絵本を読むこと

—『子どもはどのように絵本を読むのか』の書評
に対する批判に対して
正置友子（まさきともこ）

『BOOK END』第二号に掲載された、私の『子どもはどのように絵本を読むのか』（柏書房2002年）の書評に対して、絵本学会NEWS No.22において、その本の監修者である谷本誠剛氏より批判文が寄せられました。私の書評に対して、お考えを寄せてくださったことに、まず、感謝申しあげます。批判文を読ませていただき、疑問に思うことがいくつかあり、再度、書くことにいたしました。

私は、一番大きな問題点として、イギリスで1996年に出版された原書Talking Pictures: Pictorial texts and young readersと日本で翻訳出版された『子どもはどのように絵本を読むのか』の間の大きなギャップを上げています。その前提として、私には、英語の原書は日本語に訳す必要があったかどうかという疑問があることも表明しています。その点は繰り返しになるので、詳しくはかきませんが（ご関心がある方は、『BOOK END』をお読みください）、手短に言うなら、英語原書の意図は、イギリス政府の教育体制が国家統制的に変更する中で、小学校低学年のクラスでは絵本が非常に有用であること、そして子どもたちは絵本読解能力を持っており、識字教育にも役立つことを小学校の教師（と、世の人や政府の人）に伝えることがあります。そこには、お仕着せの教育ではなく、自分たちが選んだ教材（絵本や児童文学の本など）で教育したい、教育の自由と自主性を守りたいとする教師たちと、その考えを進めて

いるホマトン・カレッジ（ケンブリッジで唯一の教育系大学）の教員たちの熱い願いが根底にあります。書評にも書きましたが、もしこの本が日本に紹介して役立つとしたら、教科書を選択する権利さえ奪われている教師（と、子どもの本に関わる人）に向けてであり、子どもたちにとっての絵本の可能性を伝えるにあったでしょう。

こうしたことを前提にして、いくつかの疑問点を挙げているのですが、批判文では、その点が噛み合っていないような気がします。また、食い違っている点もありますので、改めて、ここに疑問点を列挙しましたので、お考えを聞かせていただきたいと存じます。

1) 装幀について

原書と日本語版の装丁の大きな違いについてのお答えとして、「シリーズ全体の表紙を統一したためである。書評という社会的責任を負う作業では、押さえて欲しい基本だ。」と書いておられます。ここには「シリーズ全体の表紙の統一」は当たり前という認識が働いています。そうとは言えないのではないかでしょうか。例えば、絵本のシリーズで、表紙（あるいは、装丁）を揃えて翻訳出版してもいいものでしょうか。表紙の統一というのは、理由にならないのではないかでしょうか。このことが、「書評という社会的責任」とどう関わるのか、お教えください。

2) イントロダクションについて

日本語版監修者が、原書のイントロダクションを書き換えていることについて納得がいかないと書いたことに対して、「監修者によるイントロダクションは全体としてこの本のなかの論文についてあらかじめ解説することを意図しており、識字教育にかかるイギリス的な事情にもふれています。その知識がないとやはりこの本にある論は読みづらいからである。」と、日本の読者の便宜を図って書き換えたとされています。確かにイギリスの事情にもわずかに触っていますが、ポストモダン絵本とはなにか、について21ページからなるイントロダクションのほとんどを費やしています。谷本氏の批判文の中にも「イントロダクションについては、我が国でポストモダン絵本を正面から解説したのはこれが最初だという反応もいただいている。」とあります。私が反論しているのは、このイントロダクションがポストモダンの解説文として良いかどうかではなく（ポストモダンの解説としては適切です）、この本のイントロダクションとして良いかどうかです。「絵本とポストモダン」については、原書の編集者でもあるスタイルズが第2章で扱っています。監修者としては、これだけでは日本の読者に不足と察し、イントロダクションで「ポストモダン絵本とはなにか」を詳述されたのでしょう。結果として、本全体が、ポストモダン絵本を読み解く方法としての方向付けが行われ、原

書の目的（日本人には不適切もしくは不必要と考えられたのでしょうか）がはっきりしなくなっています。

3) 子どもと絵本をシェアする実践例について

本文は、12章中の11章に亘って、著者たちが、子どもたちと絵本を読み、子どもたちが絵本を読み解く能力を展開しています。その実践例に触れて、私は、日本では本書よりももっと豊富な実践例があるのではないかとして、例として「文庫を30年してきた筆者も、このような例ならいくつでも挙げることができる」と書きました。（私の脳裏には、文庫で子どもたちと読んできた数々の具体的な絵本と、子どもたちの読み取り方から得た感動的な絵本との出会いが浮かんでいました。）これに対して、谷本氏は、「書評者はここにあるような子どもの反応は読書会でもやればすぐに分かることだという。しかし、そういう感想と子どもの実態にねばり強く目をこらす実践報告とはおのずと別である。」と書かれています。ここには、大学の教師は子どものことも絵本のこと、文庫のおばさんよりもずっとわかっている、そこらの読書活動をしている人と大学の研究者と一緒にすることはなにごとか、という姿勢が見えます。文庫をしている人は、子どもと絵本を読むことを研究のためにやっているではありません。本を書くために、実践をしているではありません。しかし、子どもたちがどんなにすぐれた絵本を読み取る能力をもっているかを、体で感じ取っています。文庫活動は、多大のエネルギーを要する粘り強い活動です。もっと言えば、子どもと絵本にまつうに関わっている人たちは、子どもを研究実践のための実験台にすることを躊躇します。私は谷本氏のこの文章に、読書活動をしている人たちへのそこはかとない蔑視を感じ、絵本学会の問題点もこうした点にあるのではないかと思いました。付け足せば、子どもは、ポストモダン的読者そのものです。本書の中で著者たちが証明している通りです。子どもを大事にし、絵本を大事にして、子どもたちと絵本をシェアしてきた人たちは、「子どもがいかに優れた絵本を読み解く能力を持っている」（p97）かを、大学の先生に教えられなくてもよく知っています。このような意味で、日本では豊富な実践例があると書きました。

4) 書誌的研究について

イギリスでは近年、書誌的研究が省みられなくなっています。それに比べて日本では地道な書誌的研究も始まっています。それに対して、谷本氏は、ポストモダンの絵本の出現と「テクストの意味は読者が作る」という考え方方が出てきたこと、だから、「時代の変化とともに絵本そのものが変わってきたのであり、そこでは書評者の主張する『絵本史の地道な書誌的研究』がもはや有効ではなくなっ

たという事情がある」と書いておられます。時代の変化とともに絵本の表現は変わります。だからこそ、いつの時代になっても書誌的研究は必要です。私がイギリスで6年間かけて研究したのは、ヴィクトリア時代の絵本でした。今、関西の仲間たちと研究しているのは、戦中と戦後の子どもの本や絵本です。ともに歴史的・書誌的研究が必要です。歴史的絵本であろうが、現代の絵本であろうが、絵本を研究する時に大切なのは、歴史的・書誌的研究とテクスト（絵本そのもの）の読み取り（ポストモダンやそのほかの理論の適用も含めて）の両方が大切だと思います。書誌的研究に対する蔑視は、現代の研究者（日本とは限らず英語圏でも）の中に往往にして見受けられるのは残念なことです。書誌的研究は「物があれば、誰にだってやれる」と言われます。では、やってごらんになればいいでしょう。どんなに大変なものか。書評のなかでも書きましたが、莫大なエネルギーと時間がかかる骨身にしみる仕事です。こつこつとした地味な仕事ですが、絵本に限っても、まだまだ多くの分野で、書誌的研究が待たれています。絵本学会は、理論からと同様、書誌的研究する人をも励ましてあげてください。

5) ディヴィッド・ルイスの絵本史について

ディヴィッド・ルイスが書いている第1章の日本語の題は「絵本はなぜ多様で自由な形態をしているのか_絵本の歴史を振り返る新しい見方」とありますが、原書の題は、Pop-ups and fingle-fangles: the history of the picture bookです。ここで、著者は、これまで絵本論は、絵本の絵のみに力点をおく批評がされ、それゆえに絵本の聖典があるとされてきたことに問題があるとして、チャップブック、ポップアップもの（トイシアター、ピープショー、パノラマ絵本など）、表現方法としての風刺漫画、コマ割りマンガを紹介し、絵本の「多様で自由な絵本の形態」を述べています。チャップブックを除けば、確かに19世紀以降、こういう多様な形態の絵本が続出しました。が一方では、普通のフォーマットの絵本も厖大な量で出版されました。絵本そのものをポストモダン的にみる視点はすぐれていると思いますが、絵本史として読んだ場合、私はルイスの文章に一種の荒さを感じます。紹介されている人物や作品が有名なものであり、これらを含むそのほかの厖大な19世紀の作品群をどれだけ実際に見て、体で感じているかを疑問視するからです。また、19世紀の絵本の歴史に触れるとすれば、現代とはことなる印刷の歴史があり、技術の発展の歴史を抜きにしては、絵本の歴史は成り立たないと私は思うからです。このことは、上記の書誌的研究をないがしろにしては（自分で行うかどうかは別にして）、本当の絵本史は成立しないということと相通じます。

6) ノーデルマンやセンダックの絵本論について

谷本氏は、「書評者はルイスやノーデルマン、センダックの絵本論は大したものではなく、ノーデルマンの絵本論では日本の絵本（例えば、長新太あたりがそうだ）をカバーできないという。」と書いておられます。私はどこにも、それらの人たちの論が「大したものではない」とは書いていません。私が最終行で「日本の絵本の特質を考慮に入れれば、新しい絵本論を世界に問うことが可能である。」と書いたのは、日本から絵本論が出てほしいという期待を込めているからです。ここには二つの点を考慮に入れています。一つは、日本人は、イギリスやアメリカの絵本をよく見ているが、反対のことではないということです。例えば、『子どもはどのように絵本を読むのか』にしても、著者たちが扱っているのは、ほとんどイギリスの絵本と少しのアメリカの絵本で、非情に国粹主義的であるといえます。それも無意識のうちに。出版状況も含めて、一つの（少なくとも英語圏の）文化圏の絵本だけを子どもたちに見せていること（この本の主眼はそこにはないことはわかりつつ）は、幼い子どもたちが絵本を通して他文化に触れるチャンスを奪っているともいえます。それと関わって、二つ目には、日本の絵本には、英語圏のそれとは異なる絵本の表現方法、思想があるので、日本の絵本を含めて絵本論を展開すれば、英語圏の人たちとは異なる絵本論を書けるだろう、ということです。また、最近では、韓国などでも絵本の出版が勢いを増しており、広い視野での研究を、それぞれの理論面（例えば、ポストモダンやディコンストラクションのみならず、ポスト・コロニアル、フェミニズム、カルチュラル・スタディーズ、パフォーマティヴ（行為遂行的）、他者性、身体性など）からも構築していくことができます。

と、私の書評に対する谷本氏の批判に触発されて、考えたことを書いてみました。批判への批判ではなく、揚げ足とりにならないようにと心がけました。書評の時もそうでしたが、私の思いは、日本の絵本学研究が多様になり、深まり、充実し、日本の絵本界に寄与できることを願って書いています。絵本学会の会員は幅広い人たちから成り立っていると聞いています。その人たちの声が生かされ、絵本に関する話し合いが自由に行える場になってほしいと願っています。

最後に、今回、『BOOK END』に掲載された私の書評に、関係者でなくとも、違和感を感じられた人もあるかもしれません。それは、書評というものは、ほめ言葉を書くか、内容を紹介するかが、一般常識として通用している点にあると思います。ことに、絵本の世界では。絵本学会の存在理由は、こうしたあり方を考えることにもあるのではないでしょうか。絵本そのものについて、絵本作家について、絵本出版について、もっと自己表現としての、署名入りの書評や記事が出ることを期待しています。

■ 左の文章は、昨年の暮れに、絵本学会事務局にお送りしましたものです。

谷本誠剛先生の訃報に接し、驚いています。先生とは、昨秋にイギリス児童文学会の会でお会いし、「やあ、やあ」と握手しました。「また、反論の反論を書きますね」と申し上げたのに対して、「もちろんですよ、書いてください。ぼくも、また書きますよ。こういうことが大事なのですよ」とおっしゃってくださいました。その時、あまりにもお疲れになつていらっしゃるのが、気がかりでしたが、このように早くとは、思いもませんでした。この後も、絵本論を真ん中において、反論の反論の反論・・・を続けられると信じていました。激論を戦わせられること、そして、あの飘々としたお姿にお会いできないことが、残念でなりません。ご冥福を心よりお祈りいたします。

正置友子（まさきともこ）

絵本関係イベント案内

●WAVE in みやぎ

こどもの本が好きな人 みんなが手をつなぎ 大きな波を起
こそう

日 時 2005年2月5日（土）10:30～16:00

場 所 宮城県中央児童館

TEL 022-227-7625 仙台市太白区向山3-18-1

資料代 大人 500円（定員120名）

こども（4歳以上）無料（定員30名）

10:30 代表あいさつ 太田大八（絵本作家）

10:40 「生命の記憶」田島征三（絵本作家）

12:00 お昼休憩

13:00 読み聞かせ・紙芝居・手話による歌い読み（講談
社『世界中のこどもたちが103』原画の一部を
展示します）

13:30 「2004年こどもの本この1年」

広瀬恒子（親子読書地域文庫全国連絡会代表）

14:40 「語るよろこび聞く楽しさ」（語りあり）

宮川ひろ（児童文学作家）

16:00 終了

～こどもプログラム～

10:30 読み語り・工作

12:00 お昼ごはん

13:00 大人と一緒

13:30 貼り絵

16:00 終了

申し込み・問い合わせ

のぞみ文庫 Tel/Fax 022-221-4667

〒982-0841 宮城県仙台市太白区向山3-8-39

主催 こどもの本WAVE

代表 太田大八

事務局 :Tel/Fax 03-3633-8548

home@kodomonohonwave.com

●2005 IRSCL日本支部研究発表交流会

2007年8月25日から29日の間、京都国際会館において、
International Research Society for Children's Literature（国際
児童文学学会）大会が開催されることになっています。

本大会に先立つ2005年には、IRSCLの理事会メンバーが
大会準備で来日するため、研究発表交流会を開催すること
となりました。国際的に活躍する児童文学者たちの最新の
研究に触れる機会を広く提供するとともに、日本の研究者
の研究成果を世界に発信する場となることが、この会の目
的です。研究発表を希望する方は下記の要領でお申し込み
ください。研究発表会の後には懇親会を開き、さらに交流
を深める予定です。

多くの方々にIRSCLについて知っていただききっかけになれば幸いです。

IRSCLのweb siteはこちら ⇒ <http://www.irscl.ac.uk/>

テーマ：Representations of Otherness in Children's Literature,
Other Genres in Children's Culture

日時： 2005年3月31日10:00～18:00

会場： 神戸女学院大学(西宮市岡田山4-1)

大学へのアクセス⇒<http://www.kobe-c.ac.jp/kotu.htm>
JD104号室

(阪急電車「西宮北口」の北出口からタクシーでワン
メーター)

発表申込み：

2004年11月30日までに発表要旨(英文300語)のWordファ
イルをe-mailに添付して、山崎暁子(Akikoyamaz@aol.com)
までお送りください。発表言語は英語、発表時間は20分間
です。日本語での発表を強くご希望の方は、発表方法の工
夫をいたしますので、山崎までご相談ください。

参加申込み：

研究発表会に参加される方は、昼食(大学カフェテリア)
のご希望の有無をお書き添えの上、2月28日までに多田昌
美(irscl2005_banquet@hotmail.com)までお申込みください。
参加費は無料です。

懇親会：18:00～20:30神戸女学院大学・社交館にて。

会費は5,000円です。

懇親会の参加者は、2月28日までに、

多田昌美(irscl2005_banquet@hotmail.com)まで

*研究発表予定者は、IRSCLの理事会メンバー(Kimberley
Reynolds, Emer O' Sullivan, Clare Bradford, Anne de Vries,
Sandra Beckett, Valerie Coghlan, 吉田純子)と日本人研究者
(すでに発表希望者あり)です。

*上記研究大会のお問い合わせは、

山崎暁子(Akikoyamaz@aol.com)

または多田昌美(irscl2005_banquet@hotmail.com)まで

絵本関係展覧会案内

●軽井沢絵本の森美術館

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢182-1

TEL.0267-48-3340 FAX. 0267-48-2006

<http://www.museen.org/ehon/>

info@museen.org

●動物絵本展—歴史・寓話・物語絵本を中心に— 第2展示館にて。

会期：2005年3月2日（水）～6月67日（月）

紀元前に発祥したイソップからミッフィーまで・・・

動物たちが物語る世界へようこそ

本展では動物が活躍する「物語絵本」に注目し、その類型や誕生の歴史、技法などを見つめます。そしてそこから「人間にとって動物絵本はどのような役割を果たしているのか」「なぜ人間は動物絵本を必要とするのか」その謎に迫ります。

<展示内容>

1. 動物絵本とは何か～情報絵本と物語絵本～

・・動物絵本の分類

2. 動物絵本の誕生

・・動物絵本の歴史を紹

3. 寓話物語の世界

・・イソップ、ラ・フォンテーヌ寓話について

4. 動物絵本の類型

・・さまざまなパターンの絵本を紹介

5. 動物絵本の技法

・・擬人法と逆擬人法について

6. 動物絵本と子ども、人間

・・子どもにとって人間にとって動物絵本とは何か

<出品作品>

☆原画

エロール・ル・カイン「きつねおくさまの婚礼」ほか

☆本

アーサー・ラッカム『イソップ寓話集』、マリー・ホール・エット『もりのなか』、ケイト・グリーウェイ『ハーメルンの笛吹き』、ほか

作品点数：約120点

★併設展「欧米絵本のあゆみ」

第1展示館にて

特集：花と妖精の絵本

会期：同上

作品点数：約70点

●エルツおもちゃ博物館

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢182-1

電話0267(48)3340 fax.0267(48)2006

info@museen.org

★ドイツ・子どもの世界展

—おもちゃと本から眺める森の国—

特集：エルツ地方のクリスマス

会期：2005年3月2日（水）～10月10日（月）

子ども文化のゆたかな土壤を持ち、独自の方法で子どもたちを育んできたドイツ。本展では、ドイツで形づくられてきた子どもの小さな世界を、おもちゃと本の中に探ります。

内容

☆絵本の中に描かれたドイツのおもちゃたち

・・絵本の中に登場するドイツのおもちゃを紹介

☆おもちゃとして息が吹き込まれたモチーフ

・・聖書の物語や童話がテーマで、おもちゃとして再現された作品を紹介

☆子どもたちが遊んできたもの

・・ヨーロッパの子どもたちが遊び道具としてきたものを絵本、おもちゃによってたどります。

☆ドイツのクリスマス

・・盛大かつ厳粛に祝われるドイツのクリスマス風景を再現します。

<展示点数>およそ500点

●大島町絵本館

〒939-0283 富山県射水郡大島町鳥取50

TEL : 0766-52-6780 FAX : 0766-52-6777

<http://www.iijnet.or.jp/ehonkan/>

★どいかや絵本原画展

会期 2004年12月1日（水）～1月26日（水）

★創作教室

絵本館の創作教室は誰もが楽しめることをモットーにした「つくる」教室です。絵や工作は苦手・・という人でもだいじょうぶ！ご家族で参加して見ませんか？

☆2004創作教室

2004年5月～2005年3月（毎週第4土曜日／日曜日）

①土曜日 午前 10:00～12:00

②土曜日 午後 14:00～16:00

③日曜日 午前 10:00～12:00

●ちひろ美術館・東京

〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-7-2

TEL 03-3995-0612 / テレフォンガイド 03-3995-0820

FAX 03-3995-0680 <http://www.chihiro.jp/tokyo/>

★虹色の軌跡—ちひろの色彩

2004年12月1日（水）～2005年1月30日（日）

★長倉洋海写真展

2004年12月1日（水）～2005年1月30日（日）

●安曇野ちひろ美術館

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原

TEL. 0261-62-0772／テレフォンガイド 0261-62-0777

FAX 0261-62-0774

<http://www.chihiro.jp/azumino/top.htm>

冬期休館中

●世田谷文学館

〒157-0062 世田谷区南烏山1-10-10

TEL03-5374-9111 FAX03-5374-9120

<http://www.setabun.or.jp/>

★世田谷文学館コレクションによる企画展

「よみがえる横溝正史」

会期：平成16年10月23日（土）～平成17年3月31日（木）

開館時間：午前10時～午後6時（入館は午後5時30分まで）

休館日：月曜日（祝日の場合はその翌日）

会場：世田谷文学館 2階常設展示室

入場料：常設展示観覧料として

一般200（160）円

高校・大学生150（120）円

小学・中学生100（80）円

65歳以上・障害者100（80）円

※（ ）内は20名以上の団体料金

★「生誕100年 映画監督・成瀬巳喜男」展

会期：2005年1月29日（土）～4月10日（日）

観覧料：

一般300（240）円

高校・大学生200（160）円

小学・中学生100（80）円

65歳以上150（120）円

※（ ）内は20名以上の団体割引、障害者割引あり

●イルフ童画館

〒394-0027 長野県岡谷市中央町2-2-1

TEL 0266-24-3319(ミミズク) FAX 0266-21-1620

<http://www.ilf.jp>

★北島新平 絵本原画展

2004年12月23日（木）～2005年2月16日（水）

1926年、福島県に生まれた北島新平氏は、44年から長野県下の中学校で教鞭をとるかたわら、南信濃に伝わる郷土の祭りのスケッチや挿絵を描きはじめました。

また、教員仲間を中心に創刊した児童文学雑誌「とうげ

の旗」では、表紙絵をはじめ、作家たちが描く物語を詩情豊かな挿絵で飾り、長く中心画家として活躍を続けました。本展では、約70点の絵本原画と、絵本が出来上がるまでに重ねられた東見本やスケッチブックなどの貴重な資料を合わせて展示いたします。

★おもちゃ絵諸国めぐり

2004年11月26日（金）～2005年2月23日（水）

日本全国の郷土玩具の蒐集家だった武井武雄は、昭和4年から5年にかけ、集めた1万点にのぼる郷土玩具を、各県ごとにまとめ、40点の木版画作品に残しました。童画とは異なる武井版画の魅力をお楽しみください。

●巡回絵本展「世界のバリアフリー絵本展」

主催：日本国際児童図書評議会（JBBY）

日本ユニセフ協会

後援：絵本学会

全体問い合わせ先：

世界のバリアフリー絵本展実行委員会

TEL042-566-5403（かくあげ方）

2003年8月から2年間の全国巡回を開始した「障害」のある子どもたちも絵本を楽しめるように工夫された様々なアプローチを紹介しているこの絵本展も終盤に入りました。開催予定は一杯になり、合計45箇所を巡回できそうです。各開催地でそれぞれの開催者の企画の工夫が加味され、その地域のネットワークが開催を盛り上げてくれています。

開催にご尽力くださいます全ての皆様に、会場を訪れて絵本を手にとって見て下さる全ての皆様に、そしてその後、新しい種がまかれ、その芽を育ててくださっている全ての皆様に心より感謝申し上げます。

（絵本展実行委員会）

★<神奈川ゆめコープ>

[日時] 2005年2月3日（木）～7日（月）

10:00～16:00（土日は17:00まで）

[場所] 障害者スポーツ文化センター横浜ラポール

住所：〒222-0035 横浜市港北区鳥山町1752

最寄駅JR・市営地下鉄「新横浜駅」徒歩10分

新横浜駅前からリフト付き送迎バス（障害者優先）を運行

[定員/申込方法/費用等]

・絵本展は入場無料です。（絵本展内にも、読み聞かせなどのコーナーがありますが、事前申込不要・参加費不要です）

・併設の企画について

◎2月4日（金）10:00～12:00 ワークショップ「布お

もちゃを作ろう！」

講師：よこはま布えほんぐるーぶ

参加費：材料費実費（1,000円以内）のみ

定員：20名まで

保育：1歳以上未就学児10名まで

保育料：1歳～2歳未満600円

2歳以上～未就学児400円

◎2月6日（日）13：30～15：00

子育て講演会「母の子育て・私の子育て」

講師：岩田美津子さん（「ふれあい文庫」代表）

参加費：大人500円

定員：80名

保育：1歳以上未就学児10名まで

保育料：1歳～2歳未満600円

2歳以上～未就学児400円

*上記企画の申込方法

はがき・FAXまたは直接、横浜ラポールで申込。

1) ご希望の講座名・2) 氏名・3) 住所・4) 年齢・5) 性別・6) 電話（FAX）番号・7) 障害の有無（内容）を明記の上、横浜ラポール企画課文化担当「世界のバリアフリー絵本展INかながわ」係まで。視覚障害者のみ電話申込可。（宛先）〒222-0035 横浜市港北区鳥山町1752番地 障害者スポーツ文化センター横浜ラポール 申込締切は2005年1月14日（金）必着。応募者多数の場合は抽選。ただし、1/14以降も空きがある場合は、先着順で受付けます。保育を申込まれる場合は、「保育希望」と明記し、保育を希望するお子様のお名前・年齢・性別・障害の有無（内容）を明記の上、お申ください。希望者多数の場合は、抽選になります。[連絡先] 障害者スポーツ文化センター横浜ラポール企画 TEL045-475-2055 FAX045-475-2053（毎月第2火曜日休館日です。）

★<新潟県立博物館>

[日時] 2005年2月11日（金）～24日（木）

月曜休館（14日・21日）

9：30～17：00（入館は16：30まで）

[場所] 新潟県立博物館 企画展示室

住所：〒940-2035

長岡市関原町1丁目字権現堂2247番2

最寄り駅：JR長岡駅大手口から越後交通バス40分

博物館前下車

*絵本展入場無料（常設展示は有料）

*日本で3番目にできた高田盲学校関連の特別展示もあります。

[連絡先] 新潟県立博物館 担当 山本哲也

TEL0258-47-6135（直通）

★<松本市美術館（長野県）>

[日時] 2005年3月8日（火）～13日（日）9:00～17:00

[場所] 松本市美術館

住所：〒390-0811 松本市中央4丁目2番22号

最寄り駅 JR松本駅 徒歩12分

JR松本駅よりバス5分「松本市美術館」下車

長野道松本インターチェンジから車で15分

[連絡先] 松本短期大学&松本市美術館友の会

美谷島（びやじま）いく子 0263-32-2698

★<日本郷土玩具博物館（広島県）>

[日時] 2005年3月19日（土）～27日（日）

9:00～17:00（入館は4時30分まで）

[場所] 日本郷土玩具博物館

住所：広島県福山市松永町4-16-27

最寄駅 新幹線福山駅のりかえ JR山陽本線下り
JR松永駅南口下車徒歩5分

[連絡先] 財団法人遺芳文化財団 日本郷土玩具博物館

担当者 三谷範子

TEL084-934-6644 FAX084-934-7286

■4月以降の開催予定まだ詳細が決まっておりません。。

日程が近づきましたら、上記全体問合せ先にお問い合わせください。

★4月13日～20日 丸亀市中央図書館（現在名称丸亀市立図書館）（香川県丸亀市浜町80-1）主催：子どもの本を読むお母さんの会

★4月28日～5月8日 ふるさとわらべ館（福岡県八女郡上陽町大字横山4838番地）主催：おはなしボランティア「おはなしチャチャ茶♪」&（株）サンライズ上陽

★5月14日～27日 川之江図書館（愛媛県四国中央市川之江町2242-1）主催：四国中央市読書活動推進ネットワーク実行委員会（仮称）

★6月上旬から中旬 青森市民図書館（青森県青森市新町1丁目3-7 アウガビル内）主催：青森語り手連絡会

★6月20日～26日 広見公民館ゆとりピア（岐阜県可児市広見7丁目77）主催：花のまち可児 手づくり絵本大賞実行委員会

■2005年7月国立国会図書館国際子ども図書館（東京都台東区上野）、8月9月10月ユニセフハウス（東京都港区高輪）で、この巡回絵本展の主催団体によるまとめの展示や企画があります。 詳細は次号にてお知らせいたします。

第8回絵本学会大会のご案内

第8回絵本学会大会（2005年度）は、2005年6月11・12日の2日間、京都造形芸術大学（京都市左京区）にて開催されます。プログラム等、未決定の部分もありますが、以下のように予定していますので、ご案内いたします。

★会場：

京都造形芸術大学

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116

<http://www.kyoto-art.ac.jp/index.shtml>

★大会実行委員会：

京都造形芸術大学情報デザイン研究室内

（佐藤博一／栗田麻子）

電話075-791-9122（代）

FAX075-791-9434（代）

e-mail: kurita@kuad.kyoto-art.ac.jp

★メインテーマ：

絵本とアニメーション

★プログラム：

6月11日（土）第1日目

12:30 受付

13:00 開会式

13:30～14:50 イシュトバン・パンニヤイ講演会

15:00～16:50 シンポジウム「絵本とアニメーション」

17:00～ 総会

18:30～ 交流会（於：ホリディイン京都）

6月12日（日）第2日目

9:00 受付

9:15～ 研究発表

13:00～ 作品発表

14:20～ ラウンドテーブル

R1 「モンタージュ—絵本と映像の表現性—」

（パネラー：田名網敬一、長谷川集平）

R2 「作家研究：ディック・ブルーナ」

（パネラー：未定）

R3 「美術館と子どもの教育—絵本が果たす役割—」

（パネラー：未定、コーディネタ：大月ヒロ子）

16:30～ 閉会式

★併設作品展、アニメーション上映会、ブックフェア、シンポジウム、など計画中

京都は年間を通じて修学旅行、学会、観光などで混雑が予想されます。宿泊の手配につきましては、別紙「第8回絵本学会大会宿泊案内」をご一読の上、JTB団体旅行京都支店までお早めにお申し込みください。

京都市内には多くの宿泊施設が点在していますが、大会

実行委員会で用意しました宿泊先は以下のとおりです。

○ウェスティン都ホテル京都

（京都老舗のデラックスホテル）

シングル11,500円／ツイン10,500円

○ホリディイン京都

（会場から最も近いホテル、交流会会場）

シングル9,000円／ツイン8,000円

○三条烏丸京都ホテル（立地、市街地。交通至便）

シングル7,900円／ツイン7,400円

○上記は1名分の料金（税・サービス込、朝食付）です。

各ホテルとも大会2日目朝1回のみ、会場までの送校サービスがあります。詳しくは別紙「「第8回絵本学会大会宿泊案内」をご参照ください。

●第8回絵本学会大会研究発表者募集

○研究発表募集要項

1. 発表者の資格 絵本学会の会員であること
2. 発表テーマ 絵本および絵本の関連のある研究テーマで未発表のもの
3. 発表時間 発表20分 質疑応答10分
4. 申し込み要領
 - 1) 発表テーマ、2) 発表者の氏名・住所・電話FAX番号・メールアドレス、3) 所属機関名・職業など、4) 発表要旨（800字程度）、5) 発表時に使用する機材（PCプロジェクター・スライドプロジェクター・OHP・ODP等）以上1)～5)についてA4の用紙にワープロで横書きで記載したものを絵本学会事務局宛に郵送（ファックス、電子メールなどは不可）して下さい。また可能であれば内容をテキストファイルにし、FD・MO・CDのいずれか（ WINDOWS等OSを明記）で同時に送って下さい。
5. 申込締切 2005年3月31日（木）（事務局必着）
6. 発表者の決定 研究発表は原則として無鑑査とします。発表順・時間等は5月中にお知らせします。

*受理した原稿等は返却しません。必ず控えを取って下さい。

●第8回絵本学会大会作品発表者募集

○大会会場に会員の作品を展示し、会期中の所定の時間に出品者自らが制作趣旨を口頭で発表します。

○今年度は特別に、大会前の期間を含め6月1日（水）～12日（日）の間、公開展示します。

○以下の要領で作品発表者を募集します。

1. 発表者資格 絵本学会の会員であること
2. 発表作品 未発表の絵本。
個人制作でも共同制作でも可。

3. 発表形態 判型・サイズ・頁数などは限定しない。
原画を原寸でカラーコピーしたシート（原則として全画面）、およびカラーコピーなどで製本したもの1冊を出品する。
(デジタルメディアなどを介した発表を希望する場合は事前に問い合わせて下さい。)
4. 発表時間 口頭発表10分 質疑応答5分
5. 申し込み要領
1) 作品タイトル、2) 発表者の氏名・住所・電話FAX番号・メールアドレス、3) 所属機関名・職業など、
4) 原画サイズ、枚数
以上1)～4)についてA4の用紙に記入の上、絵本学会事務局宛郵送で申し込んで下さい。作品搬入の期日方法等については後日（4月末頃）連絡します。
6. 申込締切 2005年3月31日（木）（事務局必着）
7. 発表者の決定
作品発表は原則として無審査とします。作品搬入の期日方法等については後日（4月末頃）連絡します。口頭発表の時間等は5月中にお知らせします。

事務局からのお知らせ

●研究助成について

研究会等の活動を助成する研究助成制度について今年度は下記の2件の申し込みがあり、運営委員会・理事会で審議した上で、この2件について各3万円ずつの援助をすることが決まりました。

この制度は今後も継続いたしますので、皆様ふるってご応募下さい。

- ・日本絵本史研究会
- ・戦後60周年子どもの本・文化プロジェクト

●運営委員会

2004年7月19日運営委員会

於：日本女子大学6号館3階会議室

議事：

1. 前回記録の確認
2. 第7回絵本学会長崎大会について
 - 1) 実行委員会報告について
大会の収支決算報告と大会運営報告がなされた。
 - 2) 反省感想など
下記のような反省、感想が話し合われた。
 - ・テーマの生かされた学会であった。
 - ・活気のある大会であった。
 - ・イ・ホベック氏を招けたことは、大変よかったです。
 - ・赤ちゃん絵本、ブックスタートへの関心の高さには、驚くもの（異常？）があった。
 - ・作品発表 ⇒ 展示の仕方の工夫、会場から意見が出にくいので工夫が必要
 - ・研究発表 ⇒ 充実していた。
 - ・ラウンドテーブル ⇒ 盛況。実践的テーマが良し。

3. 機関誌『BOOK END』について

- 1) 機関誌編集委員会より、2号の収支報告。
 - 2) 次号について
 - ・次号（3号）を出すことは総会での既決事項。
 - ・三宅委員が3号の編集長となることになった。
 - ・会長・事務局長でフィルムアート社と会い、連携について正式に協議する。
 - 3) これまでの号の扱いについて
0号1号で学会に戻されたものは半額で会員へ販売。
4. 専門委員会の活動について
- 1) 研究委員会
 - ・企画委員会と協力して、講演会、座談会等を行なう。
 - ・研究委員会による用語プロジェクト研究の今後について、意見交換。
 - 2) 企画委員会

<p>9月のフォーラムの応募状況（50名）が報告された。</p> <p>3) 紀要編集委員会 次号のために、大会研究発表から推薦等の要請あり。</p> <p>4) 広報委員会 ニュース22号発行の予定について報告された。</p> <p>5. 「絵本学文献」の収録範囲について 紀要掲載の「絵本学文献」の収録範囲を決める線引きについて問が出され、収録は担当研究グループの基準で行なっていることを明記する方向で進めることになった。</p> <p>6. 研究助成について 研究助成応募は現在1件（日本絵本史研究会）。これを承認。残る2件については、再募集することになった。</p> <p>7. 会則改定の進め方について 会員から改定案への意見を7月末まで受け、その結果は次回運営委員会で報告されることになった。</p> <p>8. 2005年度大会について 2005年度大会について下記のことが確認された。 - ・京都造形大学で開催、そちらで実行委員会を組織。 ・テーマは「絵本とアニメーション」 ・会期は6月11日～12日 ・9月に事務局長が京都へ出向き、開催側と打ち合わせ。</p> <p>9. 次回運営委員会の開催日程について 次回は9月26日（日）、日本女子大学で。（後に変更）</p> <p>10月9日運営委員会 於：日本女子大学新泉山館6階石井研究室 議題： 1. 前回記録の確認 2. 第8回（2005年度）絵本学会大会について 佐藤博一氏から「大会企画案」により説明。 (詳細は本ニュース17頁別掲の通り) 3. 機関誌『BOOK ENND』について 1) フィルムアート社との打合わせ 今井、笠本がフィルムアート（奈良社長）と面会、制作の実態、経費の内訳、販売の実績が明確になった。 フィルムアート社から編集内容にも関与したい、編集実務は自社で行う旨の申し出があったとのこと。 2) 今後のあり方 - 委員の負担軽減のため編集実務はF A社に。 - 内容の関与や契約条件、契約内容については引き続き協議し、契約書に明記する。 - 機関紙編集委員が近々F A社を訪問して打ち合わせ。 3) 次号の内容 - 機関紙編集委員会は三宅を委員長に、委員は前年経験のある加持、広松を中心構成する。 - ページ数などの仕様は前年とらわれずに検討。発行が大会後になるのも止むを得ない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・特集テーマ案として「絵本のブックカタログ」 <p>4. 会則改定の進め方 会則に「専門委員会」の規定及び「随時規定」を盛り込む必要があり、先のメンバーと、笠本事務局長をメンバーに加え再度検討してもらう旨の報告が会長からあり、承認された。</p> <p>5. 絵本研究講座の開催について 12月11日（土）、日本児童教育専門学校を会場に、絵本学会主催の「絵本の時間表現」を開催することが報告され、承認された。</p> <p>6. 用語検討プロジェクトについて 研究委員会として絵本用語の研究を行うことに疑問が提出されていた件で、中川委員長から今後研究委員会としてではなく関心のある学会員を中心に研究を行う旨の報告があった。これに対し会員の関心の高い重要な研究テーマであり「用語検討プロジェクト」として研究をすすめてはどうかとの提案があり、承認された。</p> <p>7. 紀要7号投稿応募状況について 5編の応募があったことが報告され、承認された。</p> <p>8. 研究助成再募集について 「学会ニュース」22号において、10月20日までの期限で再募集すると報告された。</p> <p>9. 専門委員会報告 - 企画委員会 絵本フォーラム2004「絵本の『読み聞かせ』」の参加者数139名（会員7名）、収支報告（収入135,500円、支出14,232円、収支合計21,268円）販売物報告（合計販売冊数29冊、販売総額35,800円）があり、承認。 - 広報委員会 次号ニュースの原稿締め切りは11月末日とする。ニュース22号に新入会員名簿を掲載したが、個人情報保護の見地から問題ありとの意見があり、今後はニュースとは別に新入会員紹介をすると報告があり、承認された。</p> <p>10. 次回運営委員会 12月18日（土）、日本女子大学で開催。</p> <p>12月18日運営委員会 於：日本女子大学 1. 前回議事録確認 2. 第8回（2005年度）絵本学会大会について 京都造形芸術大学の佐藤博一氏より報告 前回決定事項に引き続き、新たに承認された事項 - 実行委員会 新たに4氏が追加承認された - 主なプログラム 第1日目 - 基調講演は海外よりイシュトバン・バンニヤイ氏を招</p>
---	--

<p>聘（決定）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シンポジウム（コーディネーター：中川素子 承認） パネラーとして3名程度を予定（未定） <p>第2日目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作品発表 作品展として、展覧会形式で開催（6月1日～12日） 展示の総数や形式については3月末の締めきり後決定する。（参加者総数によって検討） 「絵本とアニメーション」というテーマに合わせて、パソコンによる表示やアニメーション形式の展示が可能かについても主催校側で検討予定（募集時に希望の有無を入れる） ・イシュトバン・バンニヤイ氏の作品展示（決定）と同時に絵本作家の展覧会を学校企画として検討中。実行委員会企画として承認。 ・分科会（ラウンドテーブル） A室「モンタージュ：絵本と映像の表現性（仮）」 パネラー：田名網敬一、長谷川集平（確定） コーディネーター：佐藤博一（確定） B室「美術館と子どもの教育-絵本が果たす役割（仮）」 パネラー：未定 コーディネーター：大月ヒロ子（確定） C室「作家研究：ディック・ブルーナ」 「絵本研究」というテーマで人選を再検討 <p>その他：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究発表の発表時間は、発表20分質議10分とする ・発表時に使用機材にパソコンプロジェクターを加える ・応募される申し込み要領と発表要旨について、プリント以外にテキストデータをもらう。 ・研究発表、作品発表とも募集要項から年令を削除する ・作品発表時の映像については出品者の希望に添える様、実行委員が相談を受ける ・作品の展示期間を1週間から10日予定しているため、搬入の日時と方法は実行委員会から後日連絡 <p>3. 機関誌『BOOK END』について</p> <p>◎フィルムアート社との交渉結果を今井会長より報告</p> <ul style="list-style-type: none"> ・F A社との共同作業としつつ役割分担を明確にする ・編集作業費を計上する ・1,200部（採算がとれる部数）の販売を目標にする ・契約書（案）、過去の販売実績、制作費見積書、売り上げ収支報告などの資料とともに説明があった。 <p>◎第3号の企画について三宅興子氏より報告</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年1冊発行のペースを維持する ・絵本の雑誌であることを外見（デザイン）上も明確に出す。 ・カラーコード16頁本文112頁の目次案が提示された。 <p>4. 紀要『絵本学』7号について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3月中に出版予定 	<ul style="list-style-type: none"> ・投稿規定を巻末に入れる。 ・今号よりデータ組版込みで印刷所に依頼（承認）。 ・応募5点を3人の委員によって査読した結果、2点を不可、3点を条件付き採用とした。 ・採用した3点については、1月末までに訂正等をもらう。この経過については編集後記で説明する。 ・投稿論文に加えて文献リスト、絵本論リストを入れる。 <p>5. 絵本研究講座について</p> <p>中川素子氏より報告</p> <p>12月11日、日本児童専門学校において、80名の参加者を集めて開催された。 謝金7万円 会場費5千円は参加費だけでは賄えず、学会からの補助金が必要になった。 詳細は次のニュースにレポートを提出予定 ・絵本研究講座は半年～1年に1度継続したい</p> <p>6. ニュース第23号について</p> <p>本来12月末発行であるが、原稿遅滞があり遅れる。 内容は、9月のフォーラムの報告／研究講座報告／2005年度絵本学会大会予定と研究・作品の発表者募集など。 『BOOK END』第2号の正置さんの書評に対する谷本さんの反論への再反論も。 ・個人情報の取扱いに注意する（名簿等は基本的に載せない）</p> <p>7. 会則改定について</p> <p>笹本氏より、原案作成者なので客觀性を保つために改定委員を辞退したいとの申し出があり承認。 新たに会長が全メンバーを検討し直し、提案する。</p> <p>8. 2007年国際児童文学学会への協力について</p> <p>会の説明と大会日程、内容等について三宅氏より説明。 協力関係を作ることが承認された。</p> <p>9. その他</p> <p>次回運営委員会開催日程 2月27日（日）（場所未定）</p> <hr/> <p>●「絵本学会ニュース」第23号をお届けします。</p> <p>原稿を執筆して頂く方の色々な事情が重なり、発行が遅れました。そのため一部の催し物案内などに不都合が生じております。申し訳ございませんでした。</p> <p>なお今号より新入会員のご紹介は、個人情報保護の観点から、本誌とは独立したチラシにて行います。本誌に住所等を掲載したためのトラブルといったものは、これまでには発生していませんが、そうしたことを見越して対処すべきと判断しました。</p> <p style="text-align: right;">（広報委員会）</p>
---	---